

# パズドラ×デイズ

燐火月

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※この話はゲーム版を主軸に、アニメ版設定をちよろっと付け足したエース君の話です。

ビエナシテイに住む少年・エースは、ある日普通の人間の目には映らない『ドロップ』をその目に映すようになり、夏休みに祖母の暮らす島で、ドロップが見えるものたちだけがなれる『龍喚士』と呼ばれる存在として、ひと夏の冒険をし、夏休みは終わりを告げて、基本的にはいつもどおりな日常に戻った。

——はず、だった。

※この話はゲーム版『パズドラクロス』と『DOG DAYS』のクロスオーバーです。

## 目次

### 第一章 呼び声に応えて

呼び声が誘う始まりを	1
勇者とお姫さま	3
戦について各々が思うこと	7
勇者参戦	11
思わぬこと	15
緊急事態	18
ドロップ・インパクト	21
気が抜けて	26
これからのことを	28
星の傷口と勇者召喚について	31

## 第一章 呼び声が呼ぶ声に応えて 呼び声が誘う始まりを

その夏は、いつも以上に充実した夏休みを過ごせたようにエースは思う。

もともとのきっかけは、龍喚士になるには必須の能力である、星をめぐる根幹の力『ドロップが見える』ようになったことだった。

それゆえに、龍喚士たちの集う島で暮らす祖母：アンジーヌの元で基本を学ぶことを決意して、ドラゴーズ島行きの船に乗った。

それからはいろんな仲間との出会いと、自分にとっても、仲間にとっても、とても意味のある出来事ばかりで、どの出来事が一番だなんて決めきれないほど、大切な経験をして。

そしてエースは文字通りのひと夏の冒険を終えて、様々な盟友＜モンスター＞や、龍喚士仲間と出会い、星と対話して、ドラゴーズ島に行く前に想像していたより、心が大きく成長できた。

だが、あまりにも些細とはいえない、大きな出来事ばかり経験した為にか、それが一生分の体験にも等しく感じていた。

そして、エースは少しばかり、この平和な日常が、ドラゴーズ島のみんなに会えない日々が、物足りなく感じていたのもまた、事実だった。

「……なーんて、おかしいよね」

自嘲気味の言葉をこぼして、エースは考えを締め括った。

「どうしたたま、エース？」

それを聞いてしまったのか、隣で手提げ袋を持ってふよふよ浮かんでいた、エースの信頼できる盟友＜モンスター＞であり、たまドラと呼ばれる種族の、タマゾーが問いかけてきた。

「……何事もない平和が一番、とは分かっているんだけど、夏休みの体験がとんでもなかっただろ？ ……だからちよつとだけ、みんなに会えない今がつまらなく感じちゃってさ」

「エース……」

心配そうなタマゾーに、エースはごめん、と告げる。

「でも、大丈夫だよ。みんなにもう会えない、って訳じゃあないし、長い休みはドラゴーズ島に行ってもいい、ってお母さんが言ってくれたし」

「そのときは、おいらもいつしよにいくたまよ!!」

「そうだな。今から楽しみだ」

エースの言葉にタマゾーがそう言い、顔を見合わせ笑いあうのだった。

「それじゃあ家に帰ろう。お母さんから頼まれた買い出し、これで全部だしな」

よいしょっ、と抱えていた荷物を持ち直し、エースが笑ってそういうとタマゾーも笑う。

「おひるごはんたのしみたまー!!」

「そうだね、俺もおなかすいちゃったな」

そして家に帰ろうと、歩みだそうとして。

——タスケテ。

「……え?」

エースは鈴の音のような声でつむがれたその言葉に、足を止めた。きよろ、とあたりを見回すと、タマゾーとエース以外に、周りにはいない。

「……………なに、今の?」

「どうしたたま、エース?」

少し先に行っていたため、ぱたた、と羽を動かしてこちらに近寄ってきたタマゾーに、それが、と前置きして話をしようとして。

足元に、白い魔法陣が広がり、その魔法陣に書かれた文字は、全く読めなかった。

「へっ?!」

「エース!!」

がしっ、とエースの腕にタマゾーが掴まった瞬間、エースとタマゾーを光の柱が呑みこんで、消えた。

## 勇者とお姫さま

「うわああああああ——?!」

「たま——!?!」

絶叫を上げ落下するエースにしがみついているためか、同じく落下するタマゾー。

真下には、空に浮かんだ大地に作られた、石畳の祭壇。

このまま何もしないと、叩きつけられそうだし、叩きつけられるのは、間違いなく危険すぎる。

「エース、リリースするたま!!」

「りっ、龍喚<リリース>!!」

取り出したDーギアにセットされたエッグドロップから、咄嗟に呼び出したのは、翼持つエースの盟友<モンスター>の一体、大灼熱・クレナイゴウカミ。

その背でエースとタマゾーをキャッチしてから、クレナイゴウカミは真下の石畳の上に着地した。

「た、助かったよ、クレナイゴウカミ……」

「どっ、ドラゴン?!」

クレナイゴウカミの背中から、エースが声のほうを向けば、そこにいたのはエースより歳が上そうな、金髪の少年と。

「……いぬみみと、しっぽたま?」

タマゾーの言うとおり、不安そうに垂れるピンクの犬耳と揺れる尻尾を持った、ピンクの髪の少女が、並んで立っていた。

「喋った!?!」

そして金髪の少年の方は、タマゾーが喋ったことに驚いていたが。

「あの、どちら様、ですか?」

ピンク髪の少女の方は、意を決したようにエースに問いかけてきた。

「私がお呼びしたのは、シンク様、なのですが……」

少女の言葉に、エースは足元に出現した白い魔法陣のことを思い出し。

タマゾーと顔を見合わせ、クレナイゴウカミの背中から降りて、少女と少年の前に立つ。

「……まさか、とは思うんですけど……質問、良いですか」

「はい、どうぞ」

少女から許可が下りたので、エースは深呼吸してから。

「……ここって、……ビエナシティじゃ、ないってことですか……？」  
そう問いかけた。

「はい」

そして少女は想定していた通りに、頷いた。

「ここはフロニヤルドのビスコッティ共和国フィリアンノ領です」

そして少女が続けた言葉に、エースは再びタマゾーと顔を見合わせる。

「ぜんぜんきいたことないちめいたま……」

「どうしよう……。クレナ……あー?!」

タマゾーの言葉に、エースは律儀に待つてくれている、クレナイゴウカミを振り返って、絶叫する羽目になった。

理由としては、クレナイゴウカミの近くに、無残に地面にたたきつけられた、買い出しを頼まれた荷物があつたからである。

「か、買った牛乳のビンが割れてるし、卵も割れてる……。うわ、だめだこれ……」

「え、エースのおかあさんに、おこられるたま……!!」

ずうん、とへこむエースとタマゾーに。

「だ、大丈夫？ えっと、買い物途中だったの？」

少年が、心配そうに問いかけてきた。

「お母さんが営んでる軽食屋の買い出しが終わって、帰る途中で白い魔法陣が足元に出てきて、気づいたら空に……。確かに荷物まで気が回らなかつたけど……」

『ウウ……』

その言葉に、申し訳なきそうにクレナイゴウカミは小さく鳴いた。

「大丈夫、クレナイゴウカミのせいじゃないよ……。えっと……」

エースはクレナイゴウカミにそう言い、心配してくれた少年の名前

を知らないため、そこで言いよどめば。

「あ、僕はシンク・イズミ。君達は？」

「エースです」

「おいらはタマゾーたま」

そう名乗った金髪の少年…シンクに、エースとタマゾーも、名乗り返した。

それを見計らい、少女も、口を開く。

「私は、フロニヤルドのビスコツティ共和国フィリアンノ領の領主を勤めさせていただいています、ミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコツティと申します」

「つまりおひめさまたま？」

「あ、確かに」

タマゾーの言葉に納得したエースの言葉に、ピンクの犬耳と尻尾を持った、ピンクの髪の少女…ミルヒオーレは少し苦笑して。

「まだまだ未熟ですけど、領主を勤めさせていただいています。それで……この後はどうされますか？」

ミルヒオーレに問われて、エースとタマゾーは顔を見合わせる。

「……どうしよう、タマゾー」

「たまあ……」

けれど、何もいい案は出てこず。

「でしたら、私がこの世界の事を説明します。一緒に来ませんか？」

ミルヒオーレにそう提案されて。

「……そう、ですね。ここに残っても何の当てもないので、付いていきます」

「分かりました。それでは、エースさん、タマゾーさん……。えっと、そちらのドラゴンさんは……」

エースがその提案に、頷き、ミルヒオーレが困ったようにクレナイゴウカミを見たところで。

「あ、待ってください。エッグドロップに戻します。助かったよありがとう、クレナイゴウカミ。戻って」

エースがそう言い、クレナイゴウカミはおおん、と一つ吼えて、エツ



グドロップになり、エースの手のひらに納まる。

「これで大丈夫です」

「それでは行きましょう。付いてきてください」

エース、タマゾー、シンクは、ミルヒオーレの後を付いて、階段を駆け下りた。

## 戦について各々が思うこと

一同が階段を駆け下りた、その先に待っていたのは。

「でかい……」

「……鳥？」

「セルクルです。ご覧になるのは初めてですか？」

エースとシンクがそろって首をひねると、ミルヒオーレに問われる。

「えつと……はい。二人は？」

頷いたシンクが、今度はエースとタマゾーに話を振る。

「俺も初めてです」

「ミルヒオーレひめさま、せるくるが、いどうしゆだんたま？」

エースとタマゾーも始めて見たので、そう言えば。

「はい。セルクルたちはとっても頼りになるんですよ」

「うーん、龍喚士やっていると移動手段がドラゴンだから、なんか珍しく感じるかも……」

ミルヒオーレはそういつて真つ白いセルクルを撫で、エースはそれを見つつ、ぼそつと呟いた。

「ドラゴンが移動手段つて、さっきの大きいドラゴンがそうなの？」

そしてそれを聞いたシンクが、そう問いかければ。

「ちやんとドラゴンフライト……移動手段専用の、ドラゴンたちが居るんです。さっきのドラゴン……大灼熱・クレナイゴウカミは、緊急で龍喚くりリリース>しただけなんです」

「ドラゴンが移動手段なんて、凄いですねえ」

ミルヒオーレが驚いたように、そう言ったそんな折、ぱぱん、と何かが破裂するような音が響いた。

詳しく言えば、花火が破裂するような、そんな音。

「いけない、もう始まっちゃってる!! 勇者様、エースさん、タマゾーさん、乗ってください!!」

そういうと、ひらり、とミルヒオーレはセルクルの背に跨った。

エースとシンクは顔を見合わせる。

一応乗れなくもないが、セルクルは女の子のミルヒオーレはともかく、男二人を乗せて、重くないのだろうか、と思ってしまうたからである。

「えっと、じゃあ……シンクさんが乗ってください。俺とタマゾーはドラゴンに乗っていきますので」

「うん、分かったよ」

頷いたシンクが、ミルヒオーレの後ろに乗ったのを確認し、エースは黄色のエッグドロップを、Dーギアにセットして。

「トルネードホーリードラゴン、龍喚くりリース>!!」

高らかにそう言った。

今度現れたのは、白と緑のドラゴン……トルネードホーリードラゴン。

「違うドラゴン?!」

「今度は白と緑のドラゴンさんですね……。エースさん、大丈夫ですか?」

「トルネードホーリードラゴン、頼めるか?」

『オオン!!』

任せろ、という風に、トルネードホーリードラゴンは、ひとつ吼え、エースの前で膝を折る。

その背中に乗せてもらい、タマゾーはトルネードホーリードラゴンの頭に落ち着く。

「準備OKです!!」

「分かりました。それではハーラン、行きますよ!!」

セルクル：ハーランは、ミルヒオーレの言葉に立ち上がって走り出し、トルネードホーリードラゴンもその横に平行してついていった。

そして、ミルヒオーレから現在の状況やいろいろなことを聞いた後、理解したのは『隣国ガレットと戦の最中にあること』。

そして、その『戦』を、見晴らせる高台について、それぞれハーランとトルネードホーリードラゴンの背から降り、『戦』を見た三人はというと。

「……これが、戦?」

「なんていうか……」

「たたかい、ってかんじじゃないたま……」

シンクの言葉にハテナが付くことに、エースとタマゾーは、同意していた。

「はい。皆さん『戦』を見るのは初めてですか？」

なんとというか、想像とかなり違う、安全そうなアスレチックな競技のような『戦』が、繰り広げられていた。

怪我の代わりになにか丸っこい生き物に変化しているし、そうなった怪我人(?)は即座に回収されている。

というかぶつちやけていいのなら、危険なことはなさそうだ、と思えた。

「あの、ミルヒオーレ姫様。……これ人が死んでしまったり、怪我したりとかはあるんですか？」

それでも気になるので、エースが代表して問いかければ。

「とんでもない!!」

ミルヒオーレに、ものすごく否定された。

『戦』は大陸全土にしかれたルールに則って、正々堂々とするものなんです。もちろん、国と国との交渉の一手段でありますから熱くなってしまうことも時にはありますが……フロニヤルドの戦は、国民が健康的に運動や競争を楽しむための行事でもあるんです」

エースは自分達で言うところの、『龍喚士バトル』のようなものだろうか、と結論付けて。

「……敗戦が続いて、我々ビスコッティの国民や騎士たちは、寂しい思いをしています。……何より、お城まで攻められたら、ずっと頑張ってきたみなさんはしょんぼりしてしまいます」

「しょんぼり?」

タマゾーがそのフレーズを繰り返せば、ミルヒオーレはこくり、と頷く。

「はい。しょんぼりです」

「えっと、姫様?」

そこで、シンクがそう言って片手を挙げて、一同の視線を集める。

「はい？」

「僕はこの国の勇者？」

『そういえばシンクさんの言う『勇者』って何だろう』とエースは思ったが、後で聞くことにした。

空気を読んで、タマゾーも黙っている。

「はい。私たちが見つけて、私が迷うことなくこの方と決めた、この国の勇者様です!!」

はつきりと、ミルヒオーレは力強く肯定した。

「じゃあ、姫様の召喚に応じて、皆をしょんぼりさせないように、勇者シンク、頑張ります!!」

そして、ミルヒオーレの言葉に、そう返したシンクの言葉に。

「ありがとうございます!!」

ミルヒオーレが耳と尻尾をぱたぱた動かしながら、笑顔で嬉しそうにそう言った。

「それでは、急いで城に戻りましょう!! エースさんとタマゾーさんも、またついてきてください。ハーラン!!」

「トルネードホーリードラゴン、また頼めるか？」

『オオンツ!!』

ミルヒオーレとシンクはハーランに、エースとタマゾーはトルネードホーリードラゴンに声をかけて、空へと飛び出した。

## 勇者参戦

ミルヒオーレについていき、城へつくと、シンクはあつという間にメイドさんに囲まれ、ついでにその周囲を布の囲いで覆われた。

エースとタマゾーがぼかん、としていると、ミルヒオーレがシンクに『戦』のルールを説明し始める。

基本は武器で強打すること、頭や背中に触れるとタッチボーナスが入る事、先ほどあの怪我人たちがなっていた丸っこいものがけものだまと言う事。

そして、この世界に満ちるフロニヤ力と、それを使った輝力、紋章術の説明。

ちなみに紋章術に関しては、『前線に居るエクレールと言う騎士の方が詳しい』と言うことで、ぶつつけ本番らしかった。

そしてシンクが『戦』の舞台くステージへ、フィリアンノレイクフィールドへと向かい、エースとタマゾーはミルヒオーレの後ろについて、貴賓席、と言う場所に移動する。

「姫様!!」

向日葵色の髪と犬耳と尻尾を持つ、小柄な少女がミルヒオーレに駆け寄る。

「リコ、ただいまです!!」

「おかえりなさいであります!! 勇者様、来てくれたんでありますね」  
そして少女は手に持っていたものを、ミルヒオーレに渡す。

「はい。私達の素敵な勇者様です!!」

につこりと、綺麗にミルヒオーレは微笑み、手渡されたものを手に、口を開く。

『ビスコツティのみなさん、ガレット獅子団領のみなさん、お待ちせしました!! 近頃敗戦続きな我らビスコツティですが、ビスコツティに希望と勝利をもたらしてくれる素敵な勇者様が来てくださいました!!』

見る限り誰もがその手を止めて、ミルヒオーレの言葉を待っており、空中に浮かぶスクリーンには、シンクの後ろ姿が写っている。

『華麗に鮮烈に、戦場にござ登場いただきましょう!!』

パパン、と花火が上がって、軽やかにシンクは空中で身体を捻って、着地する。

「姫様のお呼びに預かり、勇者シンク、ただいま見参!!」

『ゆ、ゆ、勇者こうりーん——!!』

実況席の青年：後で聞いたところによると、フランボワーズ・シャルレーと言う名前だった：の絶叫が上がリ、フィールドに居る戦士たちの絶叫が上がった。

「……。そういえば、姫様。この方たちはどなたでありますか?」

「エースさんとタマゾーさんです。理由は不明ですが、この世界に来てしまったようなので、私がこの世界の事を説明するという約束で、一緒に来て貰ったんです」

ミルヒオーレの紹介に、少女は安心したように笑う。

「そうでありましたか。自分はリコッタ・エルマールであります。気軽にリコと呼んでほしいのであります」

「こんにちは、エースです。よろしくお願いします、リコさん」

「こんにちはたま!! おいらはタマゾーたま」

向日葵色の髪と犬耳と尻尾を持つ、小柄な少女：リコッタがそう名乗ったので、エースとタマゾーも名乗ると。

「はわっ、喋ったであります!?!」

「うーん、何処でも驚かれるなあ。……つと、ミルヒオーレ姫様、確認いいですか?」

「はい、どうぞ」

そしてエースは、不思議そうにタマゾーを見、それを見るリコッタを見つつ、気になっていたことを聞くことにした。

「戦があるけれどアスレチック競技のようなものである事、フロニヤ力と言う安全な力が働いている事、輝力と呼ばれる力が使われている事。そこまでは分かったんですけど、シンクさんが勇者、つて今更なんですけどどういう事ですか?」

「勇者様は勇者召喚によって、別世界から呼ばれた人のことで、勇者召喚は、領主や王にのみ許された、勇者を召喚する魔法なんです」

説明を受けるエースと、説明するミルヒオーレが見る、空中に浮かぶスクリーンには、タッチアウトで敵を倒していくシンクの姿。

「それで召喚されたのがシンクさんで、勇者召喚は最後の切り札、と言う訳ですか？」

「はい、そうなりますね。……参加してみたいのなら、エースさんも参加してみますか？ 砲術士とかで」

そしてシンク及び合流した若草色の髪をした垂れた犬耳と尻尾の少女：エクレール、とミルヒオーレが呼んでいた…が、一般兵に紋章砲と言う術で無双しているのを眺めつつ、ミルヒオーレはそう締めくくり、そう、エースに提案した。

「え？ ……俺が、ですか？」

エースは目を瞬かせたのち、首を傾げた。

「前線で戦うだけが戦い方じゃないんです。後方から味方を、砲撃で援護するのも立派な戦い方で、リコも砲術士なんですよ」

「自分は、紋章術で、敵に攻撃する術者であります」

「うーん、後ろから援護だけ、と言うのは性に合わないですよ。前線で盟友たちと一緒に、戦うので……」

ソウルアーマーを纏い、盟友＜モンスター＞たちと一緒に、何度強敵とぶつかり合った事か。

「？ エースさんの世界では、争いがあるんですか？」

「あ、えっと、そう言う訳じゃなくて……」

『来たー!! 来ましたー!! レオンミシエリ閣下!! 戦場到着!!』

エースが言葉を探してまごついた瞬間、フランボワーズが叫び、一同が空中のスクリーンを振り返る。

そこには雄々しいセルクルに跨った、銀髪金目の女性が映っていた。

「レオンミシエリ閣下……。ガレット獅子団の？」

「はい、現在のガレット獅子団領国の王レオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ閣下です。閣下と呼ばないと怒られますよ」

「あ、はい」

「わかったたま」



エースとタマゾーが頷いたところで。

「あ、勇者様がエクレに蹴り飛ばされたであります」

『この勇者意外とアホか?』

リコッタとフランボワーズの言葉に。

「……………どうしたんだろ?」

「なにがあつたたま?」

「……………何があつたんでしよう……………?」

「分からないであります」

上から、エース、タマゾー、ミルヒオーレ、リコッタの順で、首を傾げるのであつた。

## 思わぬこと

空中のスクリーンに映る映像が蹴り飛ばされたシンクから、ドーマと言わらしい雄々しいセルクルと一緒に、弓を放った兵士たちを撃退した上で、ポールエリアを抜けていくレオンミシエリに切り替わった。

そしてレオンミシエリが難関すべすべ床のすり鉢エリアに差し掛かったところで。

『させるかあああ!!』

叫んで飛びかかるシンクとエクレールが映った：はいいが、レオンミシエリに迎撃された上に、とんでもない威力の紋章砲『獅子王炎陣大爆破』が発動された。

味方まで巻き添えを喰らっていたが、高威力なのは確かである。

「っ……!!」

「シンクさん、エクレールさん!!」

隣でミルヒオーレとリコツタが息をのみ、エースは叫んで手すりから身を乗り出す。

『フランボワーズ、確認せい!! 勇者と垂れ耳はちゃんと死んだか?』

『あー、はい。えーとですねー……』

斧を担ぎ直すレオンミシエリの言葉に、実況席に座るフランボワーズが答えようとした時。

『そう簡単に、やられるかー!!』

『ねえこれ高すぎない?!! あー!!』

エクレールとシンクの叫び声が、木霊した。

全員がその発生源である空を見上げると、落ちてくるシンクとエクレールがいた。

「え、空?! なんで!？」

「多分ではありますが、エクレが紋章砲を撃って、空に飛んだんであります!!」

エースが驚くと、横でリコツタがそう言い。

「なるほどたま」

「ほっ……」

更にその横で、タマゾーが納得し、ミルヒオーレが胸を撫でおろしていた。

その瞬間、エクレールにシンクが蹴られた。

「!？」

全員がぎよつとし、凍りついたその途端、レオンミシエリとシンクの武器である斧と棒がぶつかり合い、火花を散らす。

それで落下の衝撃を殺したシンクがとん、と着地すると同時、エクレールも着地し、同時にレオンミシエリへと挑みかかる。

咄嗟に斧と盾でその攻撃を受けるも、粉々に砕け散り、レオンミシエリが驚きに動きを止めたその隙を。

二人は見逃さず、連撃を攻撃を叩き込み、さらにすれ違いざまに攻撃を叩き込んだ。

その瞬間、鎧部分とマントが、ぼろぼろになって、破壊された。

『うむ、チビと垂れ耳相手と思うて少々侮ったか。このまま続けてやっても良いが、それではちと、両国民へのサービスが過ぎてしまうのう』

くるりと、楽しそうにその場で回ってポーズをとるレオンミシエリ。

『レオ閣下、それでは……』

『うむ。儂はここで、降参じゃ』

エクレールの言葉に頷いた、そういつてびよこり、と白旗をどこから取り出すレオンミシエリ。

——その瞬間、花火が打ち上がる。

『まさか、まさかのレオ閣下敗北!! 総大将撃破ボーナスの350点が加算されます!! 今回の勝利条件は拠点制圧ですので、戦終了とはなりません、このポイント差は致命的!! ガレット側の勝利はほぼないでしょう!!』

「やったあ!!」

「やったであります!!」

フランボワーズの言葉に、手を取り合って跳ねるミルヒオーレと、

リコツタ。

「……あれでも勝利なんだ……。で、タマゾー、見えない。前が見えない」

「エースはみちやだめたまー!!」

教育に悪い、とばかりに頑張るタマゾーのおかげで、エースは前が見えなかった。

それから少しして、映像が向き合うシンクとレオンミシエリに切り替わる。

その際、レオンミシエリの格好は、軽装の服、という判断をされてタマゾーガードは解かれた。

『勇者よ、親衛隊長の助けがあったとはいえ、儂に一撃入れたことは誉めてやろう。だが、今後も同じ活躍をできると思うなよ』

ぽい、とシンクにマイクを投げるレオンミシエリ。

『ありがとうございます、ひめさ……』

『閣下!!』

そして、ぴしり、と尻尾でシンクを指して、そう言ったレオンミシエリ。

『閣下!!』

『うむ!!』

シンクの言葉に、笑顔で頷いたレオンミシエリの尻尾は今度はエクレールを指し。

「エース、めをとじるたまー!!」

そしてそれを受けた、シンクがマイクを投げ渡し、エクレールが受け取ったその瞬間——何かを察したらしいタマゾーにより、何も見えなくなったエースだった。

「なに、何があったの!?!」

「シンクさんがぼうぐはかいをエクレールさんにやったたま」

「……………。なにやってんだらう、シンクさん……」

冷静に状況を伝えてくるタマゾーに、まさか防具破壊を味方にやらかすとはと、エースは苦笑いするのであった。

## 緊急事態

エクレールが服の代わりに、布を身体に巻きつけたところで、ようやくタマゾーガードは外れた。

歯車の足場が動く中、ナイフを振るうエクレールと、軽やかにエクレールのナイフを避けるシンク。

全員が苦笑しつつ見ていたそんな中、タマゾーだけが突如、その顔を青ざめさせていた。

「エースエース!!」

「どうしたの、タマゾー?」

慌てるタマゾーを、エースは見上げる。

「このかんかく、まずいたま!! ドロップ・インパクトがおこるたま!!」

「……」

一瞬、シンクとエクレールの喧嘩の映像が写る、空中のスクリーンとそこから聞こえる声をバックに、エースが凍って。

「はあっ?!」

我に返って、叫んだ。

「え、この世界、良くは知らないけど……え? 嘘? どこで起きるの!?!」

「あそこでおきるたま!!」

タマゾーが示したのは、今、シンクたちのいる、動く歯車が足場のエリア。

「どうかしたでありますか?」

リコッタが突如慌てだしたエースとタマゾーに、首を傾げる。

「ミルヒオーレ姫様、この戦中断して、今シンクさんたちが居る場所の近くに居る人たち、避難させられますか!?!」

「な、何か、起こるんですか?」

しかしリコッタの問いを流すほど、焦ってそう言い、シンクたちが今居る場所を示す、エースの慌てっぷりに吞まれつつ、ミルヒオーレは何とか問い返す。

「ドロップ・インパクトが起こります!!」

「ドロップ、インパクト……でありますか?」

リコッタは不思議そうに目を瞬かせる。

「今は説明している時間がありません!! 避難が遅ければ、下手をすれば命にかかわります!! 後から説明をちゃんとししますので、今は何も聞かずに、避難指示をしてください。お願いします!!」

「……分かりました」

エースの必死さに、ミルヒオーレは領いて、マイクを手に取る。

『皆さん!! すみませんが、手を止めてください!!』

ミルヒオーレがマイクを通じて声を張り上げると、皆がその手を止めた。

『今は戦の途中ですが、緊急事態が起こるらしいので、戦中断を、主催者として宣言します!!』

その言葉に、困惑とざわめきが、フィリアンノレイクフィールド中に広がっていく。

『緊急事態が起こる場所は、現在勇者様と親衛隊長のエクレールの居るエリアです。説明はこの後、必ずしますから、今は急いでそこから避難をしてください!! フランボワーズさん、案内をお願いします!!』

『は、はい!!』

ミルヒオーレの言葉に、実況席のフランボワーズが領いた。

「これでいいですか?」

「ありがとうございます、ミルヒオーレ姫様達!! 後は、俺達が被害を食い止めに行きますから」

その言葉に、ミルヒオーレとリコッタは目を見開く。

「危険なことが起きるなら、一緒に避難するであります!!」

「そうです!! 危険なら……」

リコッタとミルヒオーレの言葉に、エースは首を横に振る。

「大丈夫です。俺は龍喚士ですから!!」

そう言うなり、ばつ、と貴賓席のテラスから、エースとタマゾーは下へと飛び降りた。

『ええええ?!』

ミルヒオーレとリコツタが叫び声をあげて下を覗き込むと、ばさりと羽ばたきの音が聞こえ、ぶわり、と強い風がミルヒオーレとリコツタの頬を叩き、とっさに目を閉じる。

『オオオオン!!』

咆哮が聞こえ、風がやんで目を開けると、背中にエースとタマゾーを乗せた、赤いドラゴンがシンクとエクレールの居るエリアに飛んでいくのが見えた。

それは、祭壇でミルヒオーレを見た、赤いドラゴンだった。

「ど、ドラゴンであります!! そういえばさつきも、ハーランの隣に白と緑のドラゴンがいたであります、もしかして……」

リコツタのその言葉に、ミルヒオーレは頷く。

「はい、エースさんが今のように、呼び出していました。あのドラゴンさんも、エースさんが呼び出していたドラゴンです。何が起ころのか詳細は分かりませんが、今は避難誘導の手伝いをしましょう」

「はいであります!!」

ミルヒオーレの言葉に、リコツタが頷いて、二人は避難誘導の手伝いに行こうと、貴賓席の入り口に向かおうとした瞬間。

——ドオン、と地響きのような音が大気を震わせた。

## ドロップ・インパクト

風を切って飛ぶクレナイゴウカミの背で、エースとタマゾーはその『音』を、確かに聞いた。

「まにあわなかったたま……!!」

大気を震わせた『音』に、そしてその『目』に映った、星をめぐる万物の根源たる力、『ドロップ』が光の渦と共に、噴き出す光景に、タマゾーが声を漏らす。

「まずい、まだ避難し切れてない人たちと、シンクさんとエクレールさんが……え!？」

眼下の状況を見下ろして、『危ない』と続けようとしたエースが言葉を途切れさせて、絶句した。

その理由は、ドロップが渦巻いてあふれる、光の渦の中から咆哮を上げて、現れた姿があったからだ。

それは、重岩龍・ガラムットと、モリガノン3体。

「あれは、……ドロップ・インパクトのえいきょうをうけてるたま……」

そしてその目は、到底正気を保っている状態とは、言えなかった。

「!! シンクさん、エクレールさん、にげるたま——!!」

ガラムットとモリガノンが、一般兵を逃がしているシンクとエクレールへと襲い掛かろうとしている事に気づき、叫んで飛び出すタマゾーが光に包まれる。

「皆、お願い!! —— 龍喚くりリース>!!」

エースはDーギアを掲げ、そう叫んだ。

光に包まれたタマゾーの後についてDーギアから、弓から放たれた矢のように、光が放たれ、—— 轟音と共に、土煙が大地を覆った。

「けほっ、……な、何が起こったんだ……。こほっ……」

タマゾーとエースの叫び声が聞こえ、突如出現した『謎のカラフルな光の球体』があふれる『光の渦』から現れた、謎のドラゴンたちが襲い掛かってこようとした瞬間、シンクとエクレールの間に割って入



るように、光が大地を貫いたのまでは見えたが、その後に発生した土煙のせいで、何も見えない。

その後すぐに幸いにも、土煙が消えてくれた。

しかし、土煙が消えたその後には、奇妙な格好をして槍を持つタマゾーと、2体のドラゴンと、剣を構える下半身が蛇の女性がそこに居た。

「ま、またドラゴン……と、よく分からない……人？ と、タマゾークん?!」

「な、なんだこいつらは……?!」

シンクが驚き、エクレールが身構えると、その前にどすん、と重い音を立てて、一番最初に見た赤いドラゴンが降り立ち、その背に立っていたのは。

「え、……エースくん?!」

険しい顔をして、光の渦から現れたドラゴンたちを見る、エースだった。

そしてエースは赤いドラゴンの背から降り、こちらに駆け寄ってくる。

「シンクさん、エクレールさん、ここはドロップ・インパクトの近くで、とても危険なので、避難してください。あとは、俺たちが引き受けます」

「貴様、あの光の渦や光の球体、それにあのドラゴンたちが何か、知ってるのか!?!」

エクレールが、エースの言葉に噛みつくようにそう言うが。

「今はそれに答えてる暇はありません!! 俺がモンスターたちを抑えますから、先に逃げてください!!」

「そんな訳にはいかない!! まだ、一般兵の避難が完了していない!! それに、子供のお前一人に任せて逃げられるか!!」

エクレールがそう言うと、シンクが頷き。

「エクレールの言うとおりだ!! 避難も完了してないし、それに第一逃げるならエースくんもだよ!!」

そう言ったシンクの言葉に、エースは首を横に振る。

「俺は新米で、まだまだ未熟だけど……龍喚士です。逃げません」

決意のこもったエースのその言葉に、シンクとエクレールは言葉を失うが、すぐに顔を見合わせて、頷きあう。

「リユウカンシ……が何かは、知らないけど……エースくんが残るって言うなら、僕も残る!!」

「私も残るぞ。お前や勇者が逃げない以上、一般兵たちを避難させたとしても、いつまで経っても避難が完了したとは言えない」  
「ええ?!」

シンクとエクレールの言葉に、エースはぎよつとする。

「ドロップ・インパクトの影響を受けて、あのモンスターたちは狂暴化してるんですよ!? それにそれに……」

「エース、はやくきめるたま!!」

「っつ……!! ああもう!!」

エースが言葉を言い募るより早く、謎のドラゴンたちを抑えていたタマゾーの言葉に、しばし葛藤した後、叫んで。

「あのモンスターたちは、盟友<モンスター>の皆と俺で何とかします。だから、兵士さんたちの避難の続きをまかせてもいいですか?」

「分かったよ!!」

「この状況を、どうにかできるんだな?」

シンクが笑顔で頷き、エクレールがそう言う。

「どうにかします!! だって俺には、頼もしい盟友<モンスター>たちがいますから!! 力を貸して、皆!!」

エースの言葉に、タマゾーを筆頭にドラゴンたちと下半身が蛇の女性性が、一旦謎のドラゴンたちから距離を取り、それぞれ戦闘の構えを取る。

そしてエースは、先ほどからドラゴンを呼び出すときに使っている奇妙な機械を構え、メダルのようなものを取り出し、それを指でピン、と上に跳ね上げ、キャッチして、奇妙な機械へと、セットした。

「クロスオン、大灼熱のソウルアーマー!!」

すると、着ていた服が一瞬で、胸や肩に鎧のついた服へ変わり、手足に鎧が装備され、背中に羽根のようなものが出現し、最後にドラゴ

ンを模したようなヘルメットが、顔を覆い隠すように装備された。

「リーダースキル、紅蓮の轟焦尾!!」

ぱつ、とエースが片手を翳すと、赤い光が地面を伝い、タマゾー、ドラゴンたち、下半身が蛇の女性へ伝わる。

「行くよ、皆!!」

そう言ったエースが何も無い空に向けて両手を翳し、動かすと、空を荒れ狂う謎のカラフルな光の球体の内、赤い球体がエースの方に、集まっていく。

それがどういう事なのか、よくは分からなかったが、シンクとエクレールは領きあつて一般兵たちの避難を再開した。

しかし、光の渦から現れたドラゴンたちの中で、一際大きな、頭と背中に巨大な角を持つドラゴンが吼えると、一般兵に襲いかかろうとしたので、それを守るように、シンクとエクレールが立ち塞がる。

「させない!! 紅蓮華の女傑・エキドナ、『威嚇』!!」

エースがそう言って、赤い球体を3つ揃えるとそれが光となって、下半身が蛇の女性の中へ消える。

そして、それを待っていました、と言わんばかりに、下半身が蛇の女性は微笑むと、剣を高く掲げ、吼えた。

その瞬間攻撃しようとしていた、頭と背中に巨大な角を持つドラゴンが、攻撃をやめ、怯んだ。

「行くよ!! 大灼熱・クレナイゴウカミ、『インフェルノブラスト』!!」

再びエースは、赤い球体を3つ集めて揃える。

光となったそれは、最初に見た赤いドラゴンの中へ消え、今度は最初に見た赤いドラゴンの口から灼熱の炎が噴き出し、一際大きなドラゴンの側に居た、3体のドラゴンたちを消し去った。

そして、エースの周りにあった謎のカラフルな光の球体が5つ、赤い球体へと変わる。

「これなら、威力が上がる!!」

エースは今度は赤い球体を3つでなく、5つ揃えて、光へと変換する。

するとそれは、6つに分かれて、エース、タマゾー、ドラゴンたち、

下半身が蛇の女性の中へ消える。

ドラゴンたちは灼熱の炎を浴びせて、下半身が蛇の女性の方へと吹き飛ばし、そこに待ち構えていた下半身が蛇の女性が剣で、ドラゴンを空高くへ跳ね上げると——そこには、槍を構えるタマゾーがいた。

「エース、きめるたまよっ!!」

そう言つて、槍でドラゴンを叩き落とし。

「これで、」

ドラゴンが落ちる先に居た、右手に焰を纏つて放たれたエースの一撃が。

「どうだ!!」

ドゴオン、と轟音を伴つて、最後に残っていたドラゴンを消し去つた。

## 気が抜けて

覚醒幻神・オーデインにクロスオンしたタマゾーが、エースめがけて吹き飛ばしたガラムツトに、大灼熱・クレナイゴウカミのソウルアーマーの力を借りて一撃を叩き込んだエースは、警戒を解かないまますぐさま辺りを見回す。

「他にモンスターは？」

「……もう、いないたま」

タマゾーが、そう言っただけで近づいてくる。

それと同時に、背後で起こっていたドロップ・インパクトも、消えていく。

完全に消えたのを、『目』で見ているが、自分よりドロップの流れを認識することに長けたタマゾーに、確認する。

「……。タマゾー、ドロップの乱れは？」

その言葉に、目を閉じ、流れを読んでいたタマゾーは、目を開けると、にこつと笑った。

「だいじょうぶたま。乱れがなくなったたま」

「ってことは、」

エースの言葉に、タマゾーは笑ったまま頷いた。

「ドロップ・インパクト、しゅうそくたまね。おつかれさまたま、エース!!」

「……………、……………終わった……………!!」

へたつ、とその場にエースが座り込むと、慌てて盟友くモンスターたちが駆け寄ってくる。

大灼熱・クレナイゴウカミ、ハリケーンボルケーノドラゴン、獄炎龍・インフェルノたちは近づいてきて、巨大な身体を屈めて、心配そうな声を漏らす。

タマゾーと紅蓮華の女傑・エキドナは、それぞれ心配そうな眼差しをエースに向ける。

「だ、大丈夫、ちよつと気が抜けただけ……と、お腹すいて動けないだけ……」

その言葉に、盟友<モンスター>は思い思いの反応をする。

クレナイゴウカミ、ハリケーンボルケーノドラゴン、インフェルノは安堵したような雰囲気に変わり、ほうっ、と息をついて胸を押さえるエキドナに、タマゾーはクロスオンを解除して、いつもの姿に戻る。エースもDーギアにセットしたアーマードロップをはずし、いつもの格好に戻る。

「エースくん!! タマゾーくん!!」

「シンクさん、エクレールさん」

シンクがエースとタマゾーの名を呼んで駆け寄ってきて、エクレールはその後に続いて駆け寄ってくる。

「大丈夫!? どこか、怪我したの!?!」

「あ、ちよつと気が抜けただけです。怪我はありません。大丈夫です、盟友<モンスター>たちが、一緒でしたし」

慌てるシンクに、エースはそう返す。

「急に座り込むから、怪我したんじゃないかと心配で……気が抜けただけなら良かった」

そういったシンクに。

「……心配ついでもすみませんが、手を貸してもらえますか?」  
「どうかしたのか?」

そうエースが言うと、エクレールが不思議そうに首を傾げる。

しかしエースは、ちよつと恥ずかしそうに言いよんだ後。

「……えーと、実はお昼ぐはんまだ食べてなくて、……お腹すいて、下手に動くとお腹が鳴りそうで……」

そういった直後、くう、とエースのお腹の音が聞こえて、エースは顔を真っ赤にし、シンクとエクレールはきよとん、とした後、ほっとしたように、笑うのであった。

これからのことを

「勇者様、エクレール、エースさん、タマゾーさん!!」

「勇者殿!! エクレール!!」

「勇者様、エクレ、エースさん、タマゾーさん!!」

そこに、ミルヒオーレと、エースが聞いたことのない男性と、リコツタの声が響いた。

「姫様!!」

「それに兄上、リコ!!」

エースはシンクの手を借りて立ち上がりながら、そういえば同じ垂れ耳だな、と思いながら薄い色の茶髪の青年と、エクレールを見比べる。

「兄弟なんですか?」

シンクが自分の足でしっかり立っているエースを見てから手を離し、そう問えば。

「そうだよ。つと、そちらの子たちは、はじめましてだね。私はロラン・マルティノツジ。ビスコッティ騎士団の騎士団長で、エクレの兄だ。姫様から名前は聞いてるよ」

薄い色の茶髪の青年：ロラン・マルティノツジは、片手に抱えていた着替えをエクレールに渡した後、シンクの言葉に頷き、エースたちに穏やかに名乗る。

「はじめまして」

「どうもたま」

ロランにエースとタマゾーがそう返すと、それを待っていたかのようにはミルヒオーレとリコツタがエースとタマゾーに声をかけてきた。

「大丈夫でしたか?」

「無事でありますか?」

心配そうなミルヒオーレとリコツタに、エースとタマゾーは頷く。

「大丈夫です」

「怪我してないたま」

二人が頷くと、ミルヒオーレは真剣なまなざしになる。

「それでは……、エースさん、先ほどの現象、あなたの力について、教えてもらえますか？」

「もちろんです。あの状況で何も聞かず俺の言葉を聞いてもらった以上、ちゃんとします」

ぐー。

ミルヒオーレの言葉にエースが頷いたところで、悲しいか、タマゾーのお腹が空気を読まずに鳴った。

「おなか、すいたたま……」

「わわっ、タマゾーしっかり!!」  
ぐう。

落下しそうになった相棒を、慌てて受け止めたエースのお腹も、鳴ったため、エースは真つ赤に染まった顔を隠すように、タマゾーの背中に顔をうずめた。

「……お昼の席で、説明してもらえますか?」

「……すみません。……ところで質問なんですけど、『これ』見えてます?」

そう言っただけでエースは、片腕にお腹がすいてくったりした相棒を抱きかかえたまま、さきほどから周囲に漂っている、『謎のカラフルな光の球体』をちよい、と指先で突く。

すると青い球体はエースの指に弾かれて、ふよよ、と漂う方向をミルヒオーレの方へ、変える。

ミルヒオーレがエースがしたように青い球体に触れようとしたが、指先には何の感触もなく、すり抜けた。

「なるほど。見えてるけど、触れないんですね。でもなんでだろう。さっきまでぜんぜんこの場所に漂ってなかったのに……」

……タスケテ……

エースが疑問のすべてを口にするより早く、『あの声』が響いた。  
「え?」

ぱちくり、とエースが目を瞬かせると、声はこう続けた。

——タスケテ……。……コノダイチノチカラ、ミダレルマエニ……。



そして、それきり声は黙ってしまつて、何も聞こえなくなつた。

「なん、だつたんだ……?」

「エース、どうしたたま?」

タマゾー、とエースの真剣な声がタマゾーを呼ぶ。

「今の声、聞こえた?」

「なにがたま?」

やっぱり、とエースは呟く。

「ここに来る前、ついさつき、声が聞こえたんだ。でも、なんなんだ……?」

けれど答えは、出そうもなかった。

## 星の傷口と勇者召喚について

とりあえず、あの後お腹事情を慮ってくれたミルヒオーレに、お昼の席に招かれたエースとタマゾーは、食べ損ねたお昼と消費したエネルギーを取り戻すべく、遠慮なく食べた。

おそらくメイドの女性たちが入れ替わり立ち変わりに食事をもってきてくれて、目の前に置かれるのは食べたことのない料理ばかりだったが、どれもおいしかった。

ミルヒオーレの後ろに控えていたロランが、唾然としていたがスルーして、食べた。

ちなみにシンクは、エクレールとリコッタに連れられて、この世界の仕組みを知るため、城下町に行っており、エースとタマゾーも後で合流予定である。

「……なるほど、先ほどの現象は、傷ついた星を治すためには必要なこと。けれどもモンスターが影響を受け、凶暴化し、被害が出てしまう」  
その合間合間に、問われたことに素直に答えていたので、ミルヒオーレはそう話をまとめた。

「それを抑えることができるのが、エースさんのような龍喚士と呼ばれる人々という訳なんですネ……」

「抑える、というよりは、その間被害が出ないように努めるのが、役目なんです」

「そうなんですか」

目の前に置かれた器に入った料理を平らげ、そこでようやくエースとタマゾーのお腹も、満たされて落ち着いて。

「ぐちそうさまでした」

「ぐちそうさまたま。おいしかったたま」

エースとタマゾーは揃ってパチン、と手を合わせてそう言った。

「お口にありましたか？」

「とっもおいしかったたま!!」

「見たことも食べたこともない料理ばかりでしたけど、おいしかったです」

ミルヒオーレの問いかけに、タマゾーがそう言い、エースもそう答える。

「それは良かったです」

「……お腹が空いていて考えもしませんでしたけど、こんなにご飯をもらってよかったですんでしょか？ あ、ありがとうございます」

メイドの女性が、そういったエースの前から空っぽになった器をどけて、エースとタマゾーそれぞれの前に氷の浮かぶグラスに入った、ジューズらしきものを置いてくれた。

「もちろんです!! それに、さっきの出来事を考えれば、足りないくらいです」

「先ほどの一件、君がいなければもつと被害は大きかっただろうからね。……そういえば、エースくんはどうしてこちらの世界に？」

ミルヒオーレに力説され、ロランにそういわれ、タマゾーが美味しそうに、ジューズらしきものを飲む横で、エースはロランの問いに口を開く。

『「タスケテ」って、声が聞こえて、魔法陣のようなものが足元に出現して、気づいたら空に」

「……ふむ。それは、誰かに『召喚』された、ということなのかかもしれないね。でもそれならば何故ビスコッティの祭壇に……？」

先ほどから出てくる、『召喚』について知らないエースは、ロランに問う。

「召喚って、そういうえばどういうものなんです？」

「勇者召喚は、国の危機に最後に残された切り札だ。召喚された勇者はもと居た場所に帰れないという、難点を持つ故にね」

『……え？』

ロランの難しい声でそう告げられた事実には、グラスに手を伸ばしかけて、その手を止めたエースと、何故かミルヒオーレの声が、ハモつた。

「？ 姫様、どうされましたか？」

ロランが不思議そうに、ミルヒオーレに問う。

「……勇者様って、元居た世界に、帰れない、んですか？」

問われて、つつかえつつかえ、ミルヒオーレがそう言う。

「何をおっしゃってるんですか、姫様。召喚された勇者は元居た場所に帰れないということは、常識ですが……」

その瞬間、その場に痛いほどの沈黙が降りる。

「……」

「……」

エースはグラスに、手を伸ばしかけてその手を止めたまま、タマゾーも空気を読んで、口からグラスを離れたまま、青ざめていくミルヒオーレと、同じく青ざめたロランを見て、まさか、と一つの考えにいたり。

「……………姫様、まさかご存じなかった、とか」

「……」

少々青ざめたロランが、エースとタマゾーの考えがいたった言葉を告げられた、ミルヒオーレが上げた悲鳴が、お城を揺らした。

ちなみにはあるが、同じタイミングで城下町にてリコツタに説明を受けていた、シンクの悲鳴も上がったことを追記しておく。